## 学位(修士)論文要旨

二〇一四M四三〇〇四 貫田 瑛社会システム研究科 文化・言語専攻

寺門派 係であったのかについて、最澄の直弟子の一人である光定が記した『伝述一心戒文』を中 はなく、 この時期は、最澄の直弟子たちが、一枚岩でなかったと考えられる文章が、『伝述一心戒文』 性に焦点を当てることは重要なことである。 げる寺門派と、それに対して円仁を祖と立てる山門派の関係は、 心に明らかにしていく。 を十分に検討 直弟子たちが活躍する時期に注目して、彼らの間にどのような関係性が築かれていたのか 因があったのではないかと推測する。そこから、この二人よりも前からつまり最澄やその に記されている。そのため、円仁や円珍の時期から山門派と寺門派の分裂が始まったので ある義真や第二代天台座主である円澄、『伝述一心戒文』を作成した光定などがあげられる。 の間は、最澄の直弟子たちが活躍している時期である。直弟子としては、初代天台座主で ついて、未だ不透明な部分も多い。ゆえに、本論では、最澄の直弟子たちがどのような関 いた第一代天台座主である義真やその後継として第二代座主に就任した円澄の 今日における日本天台宗の辿って来た歴史を考察し への分裂に繋がったとは言 義真や円澄など最澄の直弟子たちの活躍する時期から、二派の分裂につながる要 この二派 していく必要があると考える。特に、最澄が亡くなった後に、日本天台宗を の分裂における問題に焦点を当てるとき、円仁と円珍の人物像や関係 い難い。最澄が没した後から円仁や円珍か活躍するまで しかし、円仁と円珍の関係だけが、山 ていく上で、円珍をト 注目されている論点の ップとし 関係性に 門派と 7

くと、 氏をはじめとした様々な研究者が言及してきた。しかし、先行論文を一つ一つ検証 について、検証を十分に行っていないといった問題点が浮き彫りになったことを述べ 心に次期第二代天台座主の就任をめぐった問題に注目した。この問題に関して、小野勝年 一章では、義真が亡くなった天長一〇年 史料を混同して解釈していることが判明した。また、研究者が執筆した以前の論文 八三三 七月四日以降に、 円修と円澄を中 L てい て

方からくるものである。 弟となったのも円澄が先である。それにもかかわらず、 章で取り上げた義真没後の座主の問題において、光定が円澄を支持した理由として、 読み解いていくことで、最澄の僧次に対する考え方について考察していく。これは、 と円澄の関係性を指摘したからだ。この二人は、円澄が義真よりも年上であり、最澄の門 長皇帝 | 申下文 | った。最澄は、義真を上﨟、 第二章では、『伝述一心戒文』 から、 本来の僧次は、 よって、『伝述一心戒文』巻中の「十 円澄を下﨟と定めており、 巻中の 具足戒を受戒した日から数えていくのに対して、  $\bar{+}$ 菩薩僧位次官官符達, 天長皇帝, 申下文」を これは、 最澄が後継者としたのは、 菩薩僧位次官官符達二 最澄の僧次に対する考え 義真だ 義真

大乗戒の正式な受戒は、大乗戒壇で行われるものと考えていたと推測する。 大乗戒を重要視することに起因していると見受けられる。また、最澄は、 の僧次は、 大乗戒を受戒 した日を基準としていることが判明した。 これ 日本における

考えられる。 円澄を具足戒のみを受戒した声聞僧と見なしており、義真は上﨟、円澄は下﨟に据えたと 年異なる。また、菩薩戒を受戒した日も延暦一七年(七九八)より前、 受戒日は、 暦二四年(八○五)三月二日に受戒している。 くなる弘仁一三(八二三)六月四日まで、最澄は、義真を具足戒と大乗戒を受けた菩薩僧、 る考えや大乗戒壇設立の構想が念頭に置かれていることが推測される。 か検証していく。これにより、義真と円澄の僧次における上下関係は、最澄の僧次に対す 公験が記されている。それに対して、 を細かく調べていった。義真は、具足戒を延暦二三年(八〇四)一二月七日、 一一月、弘仁一四年(八二三)四月一四日の三度が確認されている。そのため、義真と円 の具足戒と大乗戒の受戒した日を組み合わせて、それぞれ二人の僧次がどのようになる 第三章では、第二章において考察した最澄の僧次に関する考えを基盤として、 具足戒と大乗戒を正式な受戒制度に則って受戒したと受け取れる年月日は 円澄が下﨟であると位置付けられたのかを明らかにしていく。 『続日本後紀』延暦二四年(八〇五)四月と『本朝高僧伝』 円澄の受戒日は複数史料から読み取れた。具足戒の 義真の受戒日については、『顕戒論縁起』に 延暦二三年四月で一 大同元年 (八〇六) そのため、 ゆえに、最澄が亡 大乗戒を延 いつか

究者が言及してきたが、 子の間における騒動として目を引くのが、義真が亡くなった天長一〇年(八三三)七月四 主な史料として『伝述一心戒文』を使用しながら、初期日本天台宗の動向を検討した。 0 日以降に、円修と円澄を中心に次期座主をめぐった問題だった。これに関して、様々な研 ていないといった問題点が浮き彫りになった。 本論において、最澄の直弟子たちがどのような関係を築いていたのかを考察するために、 史料を混同して解釈していることや、 先行研究の検証を十分に行

具足戒を受戒 関係性を指摘した。 日を基準としていることが判明した。 対する考え方からくるものであった。このことは、『伝述一心戒文』巻中の くなる弘仁一三年(八二二)六月四日までに、義真は唐の国清寺に いると見受けられる。また、最澄は、 が下﨟と位置づけられたと考える。 れるべきものと考えられた。 『伝述一心戒文』において、 した日から数えていくのに対して、日本天台宗の僧次は、 天長皇帝 | 申下文」に明らかにされている。この文章から、 円澄は具足戒のみ受戒していたことになる。 最澄は、義真を上﨟、円澄を下﨟と定めており、 そこから、義真と円澄の僧次を検討 義真没後の座主の問題に言及する際、 これは、最澄が大乗戒を重要視することに起因して 日本における大乗戒の正式な受戒は、 そのため、 的してい おいて大乗菩薩戒を受 それ 光定は義真と円澄 大乗戒を受戒 本来の 義真が  $\overline{+}$ は最澄の僧次に 大乗戒壇で行 僧次 菩薩僧位 が亡 した